



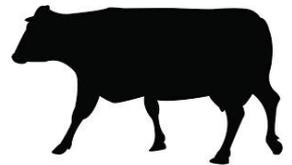
高原の風だより

2016(平成28)年6月 発行 <第5号>

地域の宝物を活かそう ~第14回全国まちづくり交流会 in 松阪~

全国各地で自主的、主体的に地域づくりを実践している団体や個人が一堂に会し情報交換をしながら交流を深めよう、と行われている全国まちづくり交流会が6月3日~5日、三重県松阪市で開催されました。北は北海道から南は沖縄まで全国から200名余りが集まり、木曾からは6名が参加しました。

伝統工芸品の深野紙 交流会2日目、午前中は松阪の田舎ツアーが行われました。最初に深野地区の「紙漉の里」を訪れ、保存会の方から話を聴きました。深野では農閑期の仕事として紙作りが行われ、最盛期には250戸の内200戸が携わっていたとのこと。今では保存会によってその伝統が守られています。例年12月から2月にかけて地元の子もたちが卒業証書作りを行っているようです。同様の取り組みは郡内でも田立和紙で有名な南木曾町でも行われていますが、伝統を受け継ぐ取り組みは素晴らしいことだと感じました。



優秀賞の松阪牛は数千万円 松阪と聞いてすぐ思い浮かぶのが牛です。あの高級ブランドの松阪牛。今回、松阪牛のふるさとと言われている深野地区の肥育農家を訪れました。少数の牛を家族のように大切に育てるのが、この地域の育て方の特徴で、木曾馬のそれと似ていると感じました。松阪牛の中でも「特産松阪牛」は「但馬地方で生まれた生後8~10か月の子牛を900日以上かけて育て上げた牛」という定義があるとのこと。じっくり時間をかけて育てることで肉のうまみが増すそうです。毎年行われる共進会で優秀賞(1席)の牛には数千万円の値が付くこともあるようです。



石の芸術 深野の棚田

平成11年に日本の棚田100選に指定された深野の棚田。すべての田んぼが石積みで仕切られており、石の芸術とも呼ばれています。(写真左)江戸中期より明治にかけて造成されたものがほとんどで田んぼの枚数は約550枚、石の推定数はおよそ300万個を超えていると言われています。

毎年秋には保存会が中心になり棚田祭りを行い手作り灯ろう2千本の明かりが棚田の曲線美を幻想的に描き出すそうです。棚田を散策しながら少し気になったのは道路の白いガードレール。道路工事の際に木製または茶系色のガードレールにできなかったか、と棚田の景色が余りに素晴らしいだけに本当に惜しい気がしました。

高校生の手作り料理

2日目の午後は飯南文化センターで開会行事や講演、分科会などが行われました。基調講演では岸川政之さん(百五経済研究所)が「高校生レストランの仕掛け人が語る」~地域の宝物を活かそう~と題して講演。相可高校の食物調理科の生徒たちにより土日と祭日に営業している人気の高校生レストランの経緯について話を聴きました。

夜は楽しみにしていた交流会が行われましたが、なんとそこで出された料理は高校生レストランで活躍している生徒が作ったもの。地元の素材を活かしたさまざまな料理がたくさん並び参加者を喜ばせました。玉子焼きなどはその場で調理して振る舞ってくれました。(写真右)調理が一段落した後、一人の女子高生に「将来はどんな道に進みたいの?」と尋ねると「和食の料理屋で働きたいです」とまぶしい笑顔が返ってきました。テレビドラマをはじめ映画にもなった高校生レストラン。生き生きと調理に励む若い高校生らは、まさに地域の宝。まちづくりに大きく貢献していることを痛感しました。今年も沢山の元気をいただいた有意義な3日間になりました。



～米国シアトル出身・旅館「亀清」(千曲市)の若旦那～

タイラー・リンチさんから学ぶ

おもてなしの心

今年3月、地域づくりネットワーク木曾支部主催の講演会が木曾合庁で行われ、タイラー・リンチさんの話を聴く機会に恵まれました。タイラーさんは、千曲市上山田温泉の旅館の娘さんである妻とともにアメリカから日本に移住して、旅館の若旦那として様々な活動をしています。

地域づくりを語る際、「よそ者」の目線が大切だとよく言われますが今回、外国人のまさに「外からの目線」の重要性を痛感しました。

先日、所用で千曲市へ行くことになりタイラーさんの亀清旅館へも実際に泊まっているいろいろな話をうかがって来ましたので、それらを含めて感じたことを少し紹介します。



講演するタイラーさん

■古びた木造建物残す

アジアやヨーロッパなど多くの国々を旅した経験のあるタイラーさん。「日本の温泉旅館には他国の宿にはない独自の魅力がある」と感じています。



日本のバブル全盛期のころ、戸倉上山田温泉も多くの旅館が木造の建物を取り壊して近代的な鉄筋コンクリートに造り替えましたが、亀清旅館はぬくもりのある古びた木造建物をあえて残しました。渡り廊下や緑あふれる中庭などの温泉旅館の風情を大切にしたいと考えたからです。

近年、海外からも多くのお客さんが訪れるようですが、「床の間のある畳の部屋や浴衣など日本の伝統文化を体験できる」ととても好評です。

■旅館の大型看板を撤去

かつて、玄関前の庭に鉄製の巨大看板がありました。(写真右)せっかく立派な松の木があるのに看板が目立ちすぎて残念だ、と思っていました。そこで、業者に頼んでクレーンを使って撤去しました。



身長 2mのタイラーさんと旅館の前庭で記念写真
そしてタイラーさんが自分で手彫りの木製看板を作りました。その看板の前で一緒に記念写真を撮らせていただきましたが、亀のイラストが描かれた控えめな看板は人の目線に合わせた高さに取り付けられてあり、木のやさしさが伝わってくるような気がしました。

■手造りの露天風呂

タイラーさんは古い伝統を生かしながら新たな取り組みにも挑戦しています。倉庫には火鉢や自在鍵、和だんすなど伝統的な古民具が眠っていましたが、これらをお客さんに見てもらおうと客室やロビーに展示しました。

また、タイラーさんは温泉が大好き。欧米人は忙しくシャワーで済ませてしまいますが、日本人の温泉に入る心のゆとりを素晴らしいと感じています。亀清旅館には外風呂がありませんでしたのでタイラー



タイラーさん手造りの露天風呂

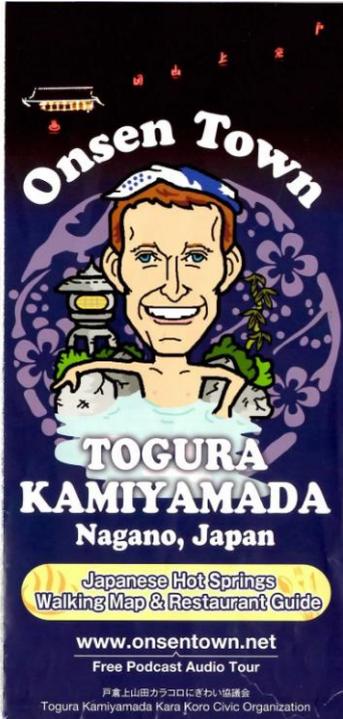
さんは自分で石を集めてくるなどして中庭へ手づくりの露天風呂を造りました。とても素人とは思えないほどの出来映えです。

そのほかお客さんに火の暖かさを感じてもらいたい、とロビーには薪ストーブを設置するなど様々な取り組みを行い旅館の魅力づくりに努めています。

■ユニークな案内サイン

亀清旅館の前には戸倉駅や冠着山、あんずの里、中央公園など観光地などへの方向と距離を示す案内サインが立っています。(写真右)日本語と英語で書かれた手製の看板です。

この看板をよく見ると右上には「シアトル 7,980km」と書かれています。タイラーさんの母国アメリカ・シアトルまでの距離と方向を示しているユニークなもので、このようなちょっとした遊び心は日本人では思いつかないことだと感じて思わず微笑んでしまいました。



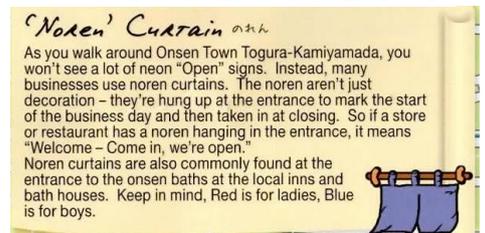
■個性的な街歩きマップ 近年、妻籠宿などだけではなく町内でも多くの外国人観光客を見かけるようになりました。サインも最近は英語併記が一般的になりつつあります。

そのような中で外国人向けのパンフレットについて、私は今まで単純に日本語のパンフレットをベースにして、そのまま英語や中国語など外国語に置き換えればそれで十分だと考えていました。しかし、それは大きな誤りであることに気づきました。よく考えてみればもっともなことですが、その国によって文化や習慣が異なり、ニーズも多様なのだということを改めて痛感させられました。

そういう観点から戸倉上山田温泉の街歩きマップ(写真左)を開いてみると、日本語のそれとは大きく異なっています。タイラーさんらが編集に関わり外国人の視点で様々な提言を行い、内容の充実が図られているのを感じます。

その中で営業停止した大きなホテルをゴーストホテルとして載せていますが、日本のパンフレットではまずお目にかかりません。

また「暖簾(のれん)」について、「カーテンを出しているときは営業中と聞いてなるほどと思った」というタイラーさん。暖簾を下ろしたのは店を閉めちゃった、という意味や暖簾分けのことなど、暖簾文化の奥深さを感じています。マップの中でもイラスト入りで、入り口にカーテンが掛けてあれば営業中、なければ休業というサインであると紹介。(写真右)お風呂では青カーテンが男性、赤カーテンが女性だとも紹介しています。このように訪日外国人旅行者にとって非常に分かりやすく洗練されたものになっていると思います。



100%かけ流しの温泉や木の温もりのある開放的なロビー、床の間のある畳の部屋、そして地元の食材をふんだんに使った味わい深い郷土料理等々、日本の温泉旅館には他国の宿にはない独自の魅力がある、というタイラーさん。これからさらに地域の良さに磨きをかけ取り組んでいきたいと張り切っています。

タイラー・リンチさん プロフィール

1970(昭和45)年、アメリカの西海岸にあるシアトル市に生まれる。ワシントン大学国際学部卒業。在学中、日本語を学び神戸へ留学体験。大学卒業後に上田市で1年半、英会話講師を務める。この時、亀清旅館の磨利さんと出会い帰国後に結婚。シアトルで10年間貿易関係の仕事に従事。

2005(平成17)年、亀清旅館の女将(奥さんのお母さん)が勇退したのを期に、後継者になることを決意し家族で日本へ。

自分の旅館だけではなく上山田温泉や長野県の魅力を外からの目線で積極的に国内外へ発信するなど、「青い目の若旦那」として多方面で活躍中。長野県のインバウンドの発展を目指す「NPO法人N I N J Aプロジェクト」代表。第2回信州おもてなし大賞受賞。

はりきりご長寿列伝

原 實子さん (85歳・木曾町) ⑤

NHKテレビのイブニング信州の中で放送している「はりきりご長寿列伝」で木曾町福島の原實子さん(85歳)を紹介させていただきました。(2月26日放送)

ここは私の店だっていう感じがする ～手芸用品の店営む～



原實子さんは、木曾町福島八沢で和・洋裁と手芸用品の店「桑名屋」を営んでいます。かつては漆器製造の店をやっていましたが、戦時中に需要が減ったため結婚してまもなく手芸店に切り替えました。「人生を乗り切るのに、(自分の)置かれた場所で素直に一生懸命生きようという気持ちがあった」と当時を懐かしく振り返ります。



原 實子さん

「ここは本当に私の店だっていう感じがする」という原さん。店に入ると手作りの人形や飾り物などがたくさん展示されています。そのほとんどが衣料の布を再利用したものです。原さんが手にしている花(写真上)も、娘さんが結婚式のお色直しで洋服を着た際にはいていたストッキングを再利用して作りました。

店内につるされた手作りの飾り雛 原さんと手芸との出会いは20年ほど前にさかのぼります。公民館サークルで手芸教室が立ち上がり、原さんがその教室の先生になったのがきっかけです。教室では古い衣類の布地を使い、主に袋などの実用品や家の装飾品などを作りました。原さんは「短い時間でもみんなが達成感を味わえるように」と“2時間手芸”を取り入れ、四角な布を合わせて縫っていけば、にぎやかなひな人形なども簡単に作ることができました。



かわいい手作りの人形

原さんには2人の娘さんがいますが、七五三などの着物がタンスにしまってあり、それらを再利用して今までに様々なものを作ってきました。「人が見ればこんなものと思うかもしれないが、私にとってはとても大事なもの」と話す原さん。それぞれの作品には、原さんの人生の思い出がたくさん込められています。

名古屋市にお住まいの作家・志賀内泰弘先生から毎回、ひとり新聞「徒然草子」を送っていただいています。その中から第7回「たった一言で」コンテストの入賞作品を紹介します。

『行ってきます』

ペンネーム 六下太郎さん(東京都府中市)

私には、中学3年生と小学6年生の息子がいます。小学6年生の息子が生まれる前、私は原因が判らず、治療も無い神経系の難病にかかりました。医者からは「3年で寝たきりになり、呼吸もできなくなり、呼吸器を付けないと死に至る」と告げられました。

あれから10数年が経ち、今の私はほとんど何も出来ず、寝たきりの生活を送っています。それでも2人の息子は、共に元気に成長してくれています。子どもたちの成長を見られることは、幸せなことで一番の喜びです。また、子どもたちの元気な声が、私にとっての治療薬になっています。

今日も子どもたちの元気な声が聞こえてきます。 「行ってきます」

編集後記

「高原の風だより」(第5号)をお届けします。いつも多くの皆さんから貴重なご意見や感想などをお寄せいただき有り難うございます。これからも皆さんの声をお待ちしています。



編集・発行者： 大目 富美雄 (おおめ ふみお)

〒397-0301 長野県木曾郡木曾町開田高原末川 5190 番地

電話& FAX 0264-42-3661 携帯 090-2526-7156

E-mail info@ome-fumio.com